

第2章

札幌市の概要

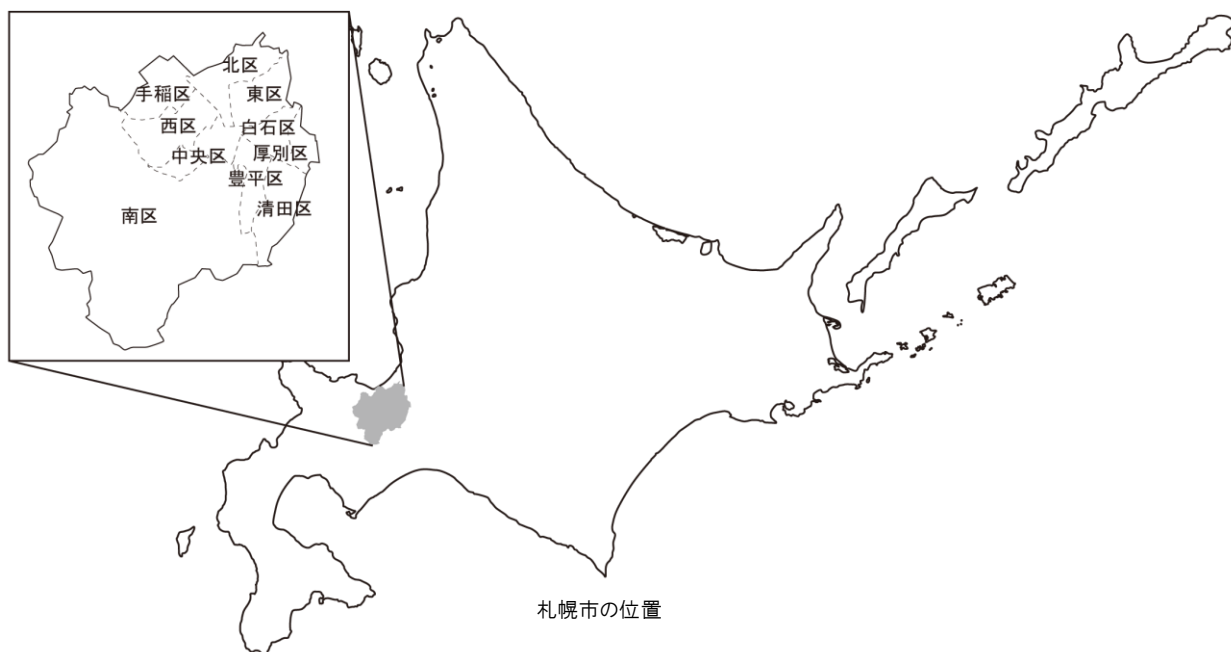
第2章 札幌市の概要

1 自然環境・地勢

(1) 位置

札幌市は、北海道・石狩平野の南西部に位置しており、市域は東西が 42.30 km、南北が 45.40 km、総面積は 1,121.26 km²で、これは、東京 23 区を合わせた面積の約 2 倍にあたります。また、東経 140 度から 141 度、北緯 42 度から 43 度に位置しており、世界ではほぼ同じ緯度に位置する都市には、ロシアのウラジオストク、フランスのマルセイユ、イタリアのローマなどがあります。

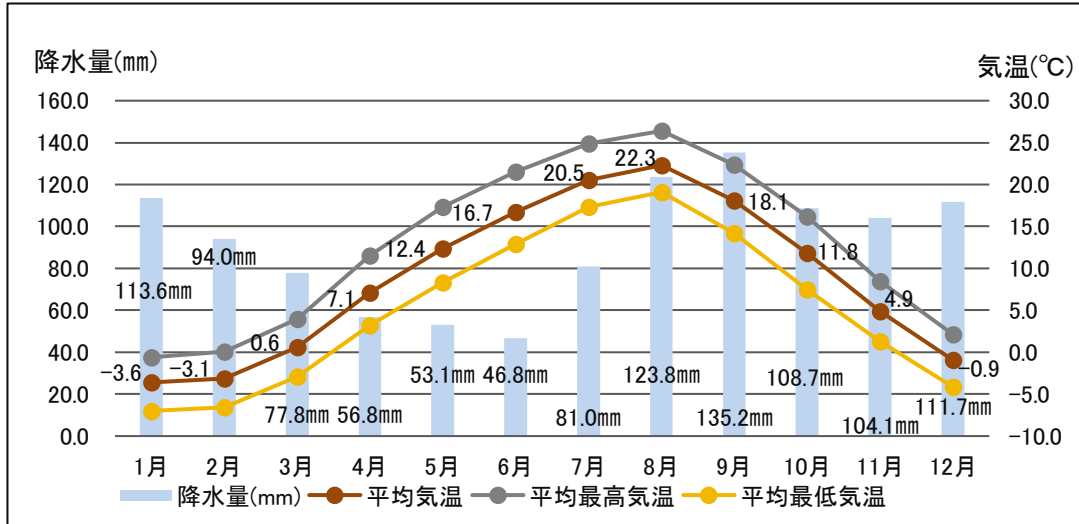
現在、札幌市と境界を接する市町村は、後志管内小樽市、赤井川村、京極町、喜茂別町、胆振管内伊達市、石狩管内恵庭市、千歳市、北広島市、石狩市、江別市、当別町の計 7 市 3 町 1 村です。



(2) 気候

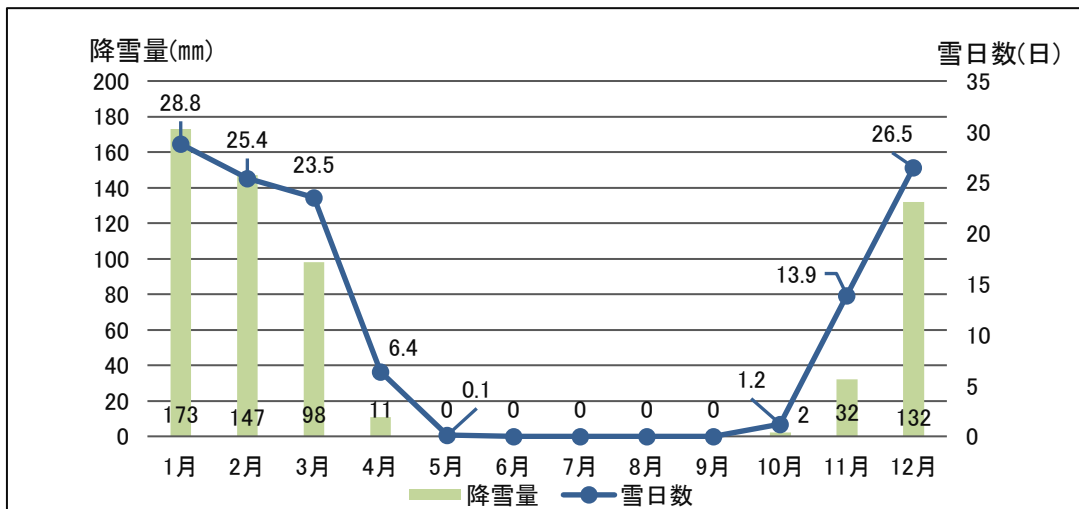
札幌市の気候は日本海型で、夏はさわやかで過ごしやすく、冬は雪が多く寒冷で、北半球の中緯度に位置することから夏と冬の日照量の較差が大きく、四季の変化がはっきりしています。4月下旬から6月は晴天が多く、花が次々と開花する様子が見られます。6月下旬から8月は平均気温が20℃を超える盛夏となりますが、湿度が低いいため、朝晩は比較的過ごしやすい傾向にあります。秋の訪れは早く、9月下旬には山間部などで木々が色づき始め、10月中旬には紅葉が盛期を迎えます。また、10月下旬には早くも初雪が見られることがあります。根雪を観測するのは例年12月で、年間を通しての積雪量は6mに達します。1月の平均気温は-3.6℃で、平均「雪日数¹⁴」は年に125.9日*です。3月に入ると寒気が緩みだし、4月の上旬には根雪がなくなって長い冬が終わります。札幌の年平均気温は8.9℃、年平均降水量は1,106.5mm*です。

※いずれも1981年から2010年の平均値



札幌市の気候と降水量の年間推移(1981年～2010年)

出典: 気象庁 HP



札幌市の降雪量と雪日数(1981年～2010年)

出典: 気象庁 HP

¹⁴ 雪日数: 雪(みぞれも含む)の降った日数。

(3) 地形・地質、植生

札幌市の地形は、南西部に広がる山地、南東部の丘陵地・台地、北部の低湿地とそこへ流れる豊平川がつくった扇状地¹⁵などから成り立っています。地質の基盤は、薄別層¹⁶という先第三系の海成層¹⁷です。

■地形・地質

【南西部 山地】

札幌の市街地を囲むように、南西部には藻岩山、円山、手稲山、三角山など標高約 200～1,000m の山々が連なっています。豊平峡、定山溪域の山地は、新生代新第三紀¹⁸（1600～1100 万年前）にユーラシアプレート（アムールプレート）の下に太平洋プレートが沈み込むことによって生成された火成岩¹⁹（主にデイサイト²⁰）で、1200 万年～600 万年前に堆積した海成層「小樽内川層」が一部露出しています。

藻岩山や円山などの札幌を取り囲む山々は、600 万年前以降の火山活動によって形成され、およそ 200 万年前に活動を休止している火山です。

【南東部 丘陵地・台地】

250 万年前以降、札幌付近はプレート衝突による東西圧縮の場となり、褶曲²¹によって野幌丘陵や月寒丘陵などの起伏が形成されました。

約 4 万年前、支笏カルデラ形成の起因となった「支笏火山」の大規模な噴火によって、支笏火砕流が発生し、大量の支笏軽石流が石狩低地帯を覆い、丘陵の麓を埋めるように厚く堆積しました。この軽石流堆積物が高温と堆積による圧力によって強く溶結したものが、南区石山などに見られる支笏溶結凝灰岩²²（札幌軟石）です。

札幌を広く覆った火山灰は、その後、河川等によって浸食され、南東部に月寒台地として残されました。月寒台地の上には望月寒川、月寒川、厚別川、野津幌川などが丘陵の向斜軸²³に沿ってほぼ南北方向に流れ、下刻²⁴したことから、台地上に東西方向に大きく起伏する地形を生み出しました。

【北部 低湿地】

札幌北部の大部分は、石狩川下流域、石狩平野の南西端域にあたり、新生代第四

¹⁵ 扇状地：川が山地から平地へ流れ出る際、土・砂・小石などが堆積して生じた扇状の地形。

¹⁶ 薄別層（うすべつそう）：渡島帯西部地域に分布する先第三系の地層。札幌でもっとも古い地層。

¹⁷ 海成層：堆積物が海底に堆積してできた地層。

¹⁸ 新生代新第三紀：地質時代の区分の一つ。新生代を三分したときの中間の紀（約 2303 万年前～約 258 万年前までの期間）。

¹⁹ 火成岩：溶けたマグマが冷え固まってできる岩石。

²⁰ デイサイト：火山岩の一種。淡色で長石・石英などの無色鉱物が 8 割以上の体積を占める。珪長質な組成。

²¹ 褶曲（しゅうきよく）：地層が波のように湾曲している状態。水平な地層に地殻変動による横圧力が加わるなどして生ずる。

²² 溶結凝灰岩：凝灰岩が溶結した岩石。高温の火山灰が大量に堆積し、その重さと高温のために圧縮されて、粒子の一部が溶けてくっつき合い、溶岩状になった岩石。

²³ 向斜軸（こうしゃじく）：褶曲した地層の谷底部分を結んだ線。

²⁴ 下刻（かこく）：河流が川底を低下させる働き。下方浸食。

紀²⁵以降、氷河期において数回繰り返された氷期²⁶の海退²⁷と間氷期²⁸の海進²⁹、および河川の堆積物によって形成された沖積平野にあります。今からおよそ 6500～6000 年前をピークとする温暖期は「縄文海進」と呼ばれ、海岸線が現在よりおよそ 5km 内陸に入り込み、古石狩湾を形成していました。海退と海進によって紅葉山砂丘が形成され、その後の海水面の低下や石狩川が運ぶ膨大な土砂の堆積によって低湿地の淡水化が進むと、湿生植物が繁茂して泥炭層³⁰を形成しました。

【中央部 扇状地】

札幌中央部は、南西部山地と南東部丘陵地・台地の間を北部低湿地へと流れる豊平川が作った扇状地です。豊平川は、およそ 4 万年前以降に真駒内・平岸方面に流れて旧豊平川扇状地（平岸面）を形成し、氷期の明けたおよそ 1 万年前以降に流路を変えて現在の豊平川扇状地（札幌面）をつくったと考えられています。

豊平川扇状地の扇頂³¹は真駒内付近の標高約 100m、扇端³²部の北海道大学、札幌駅付近は標高 15～18mです。扇端部では、かつて地上に湧き出た伏流水が池や流れを作っていましたが、その痕跡は、現在も北海道大学附属植物園（以下「北大植物園」という。）などで見ることができます。



出典：産総研地質調査総合センターウェブサイト(<https://www.gsj.jp/Map/JP/geology2-2.htm#Sapporo>)

- ²⁵ **新生代第四紀**：地質時代のうち最も新しい、人類が現れて以降現代を含む時代（約 258 万年前から現在までの期間）。氷期と間氷期を繰り返していた。
- ²⁶ **氷期**：氷河時代のなかで、温帯地方まで氷河に覆われた特に寒冷な時期。
- ²⁷ **海退**：海面の下降、あるいは陸地の隆起によって海岸線が海側に移動し、陸地が広がること。
- ²⁸ **間氷期**：氷河時代における温暖な時期。
- ²⁹ **海進**：海面の上昇、あるいは陸地の沈降によって海岸線が陸側に移動し、海が陸に入り込んでくること。
- ³⁰ **泥炭層**：植物遺体を多く含む粘土や砂からなる遺物包含層。
- ³¹ **扇頂**：扇状地の最上流部分。山地からの出口にあたる部分。
- ³² **扇端**：地表で見られる扇状地の末端にあたる部分。

■植生

現在、人口が集中する札幌市都心部の豊平川扇状地は、平野で比較的水はけがよいことから、かつては、やせ地でも生育するカシワやミズナラが多く生えていました。また、湧水等が豊富だった現在の札幌駅周辺には、ヤチダモやハルニレなどの湿生林が、扇状地の北と東の泥炭地には、湿原植生³³が広がっていました。

札幌周辺の地形・地質は多様で変化に富み、冷温帯³⁴と亜寒帯³⁵との移行帯³⁶で温帯系と北方系の植物の分布域が重なるため、道内でも植物の種類数が比較的豊富です。札幌を含む石狩低地帯が植物分布の境界となる代表的な例として、温帯系のクリやコナラの北限³⁷に当たることが知られています。植生帯としては、北海道を特徴づける針広混交林帯が山麓部で見られ、広葉樹と針葉樹がモザイク状に混生した森林となっています。

現在の札幌市は人口約197万人を抱える大都市ですが、森林面積は総面積の約64%を占め、天然林が多いことなどから、都市を取り巻く自然環境は比較的恵まれているといえます。天然記念物である藻岩山と円山にもかつて伐採された歴史がありましたが、その後の有識者や市民の活動もあって保全されてきました。また、中心部にある北大植物園内には開拓以前からの植生と地形が残された自然林がありますが、近年では都市化による地下水位の低下のための乾燥化が一因と推測される変化も見られます。湿原は1970年代までに人為的に排水されて農地となり、その後の宅地化でほとんどが消失しました。現在は北区及び東区にわずかに湿原植生が残り、絶滅危惧種³⁸を含む湿原特有の生物の貴重な生息環境となっています。札幌の植生の変遷には、明治期からのまちの歴史と、市民の自然の捉え方が大きく関わっています。

トピック

太古の札幌の自然

現在の札幌周辺は、2300 万年前以降、プレート運動や火山活動などにより、海と陸の環境を何度も繰り返しました。札幌で見つかる生物の化石の多くは、新第三紀中新世にあたるおよそ 1200 万年～600 万年前の、かつて札幌が海だった時代に生息していた生物のものです。

■サッポロカイギュウ

平成 15 年（2003 年）に豊平川で化石が発見された、現在までに発見されているものでは世界最古の大型カイギュウです。札幌市博物館活動センターで復元骨格標本が展示されています。

■鯨類化石

平成 20 年（2008 年）に小金湯温泉地区（札幌市南区）豊平川河床で、およそ 900 万年前と考えられる鯨類（セミクジラ科）等の化石が発見され、札幌市博物館活動センターで現在も調査が行われています。



サッポロカイギュウ復元模型
出典：札幌市博物館活動センター

³³ 湿原植生：過湿かつ低温であるために、有機物の分解が進まず堆積して泥炭となった場所に成立する植生。

³⁴ 冷温帯：温帯のなかで、冷帯に近い地帯。

³⁵ 亜寒帯：温帯と寒帯の間にある地帯。冷帯。

³⁶ 移行帯：二つの異なる動植物区系、または植物群落などの間にある地帯。両者の構成種が混在する。

³⁷ 北限：北の限界。

³⁸ 絶滅危惧種：個体数の急減もしくは生息地の喪失などにより、絶滅の危機に瀕している動植物等の種。

2 社会的環境

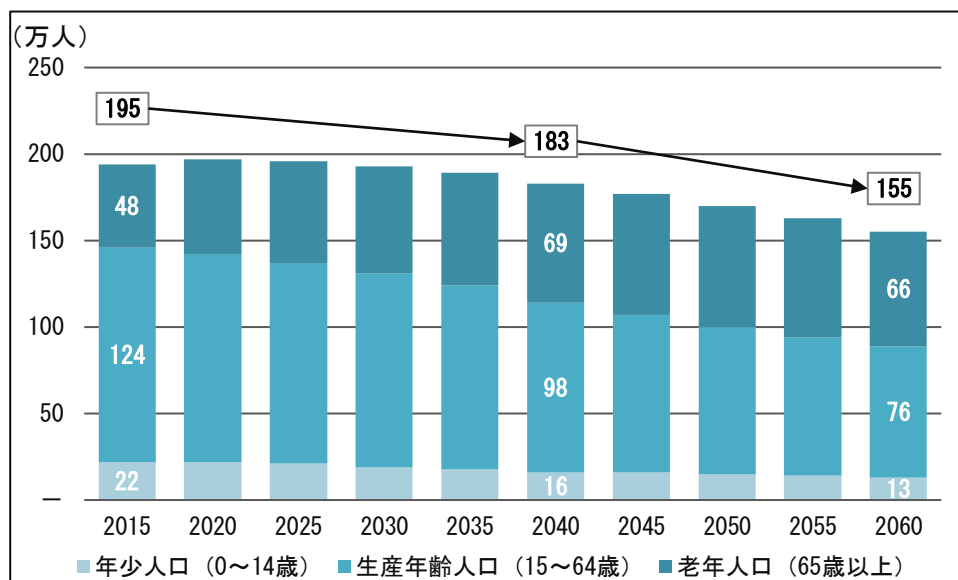
(1) 人口

札幌市の人口は1,965,940人、世帯数は953,039世帯で、市町村の人口規模では全国で4番目です*。

北海道の人口が平成9年(1997年)をピークに減少する中、札幌市の人口は令和元年(2019年)時点で緩やかな増加傾向にあります。令和2年(2020年)ごろをピークに減少に転じることが見込まれています。

総人口に占める年齢層別の人口割合では、14歳以下人口が今後約40年間横ばいで推移すると予測される一方、65歳以上の高齢者は令和22年(2040年)に69万人、令和42年(2060年)に66万人となり、少子高齢化の進行が予想されています。

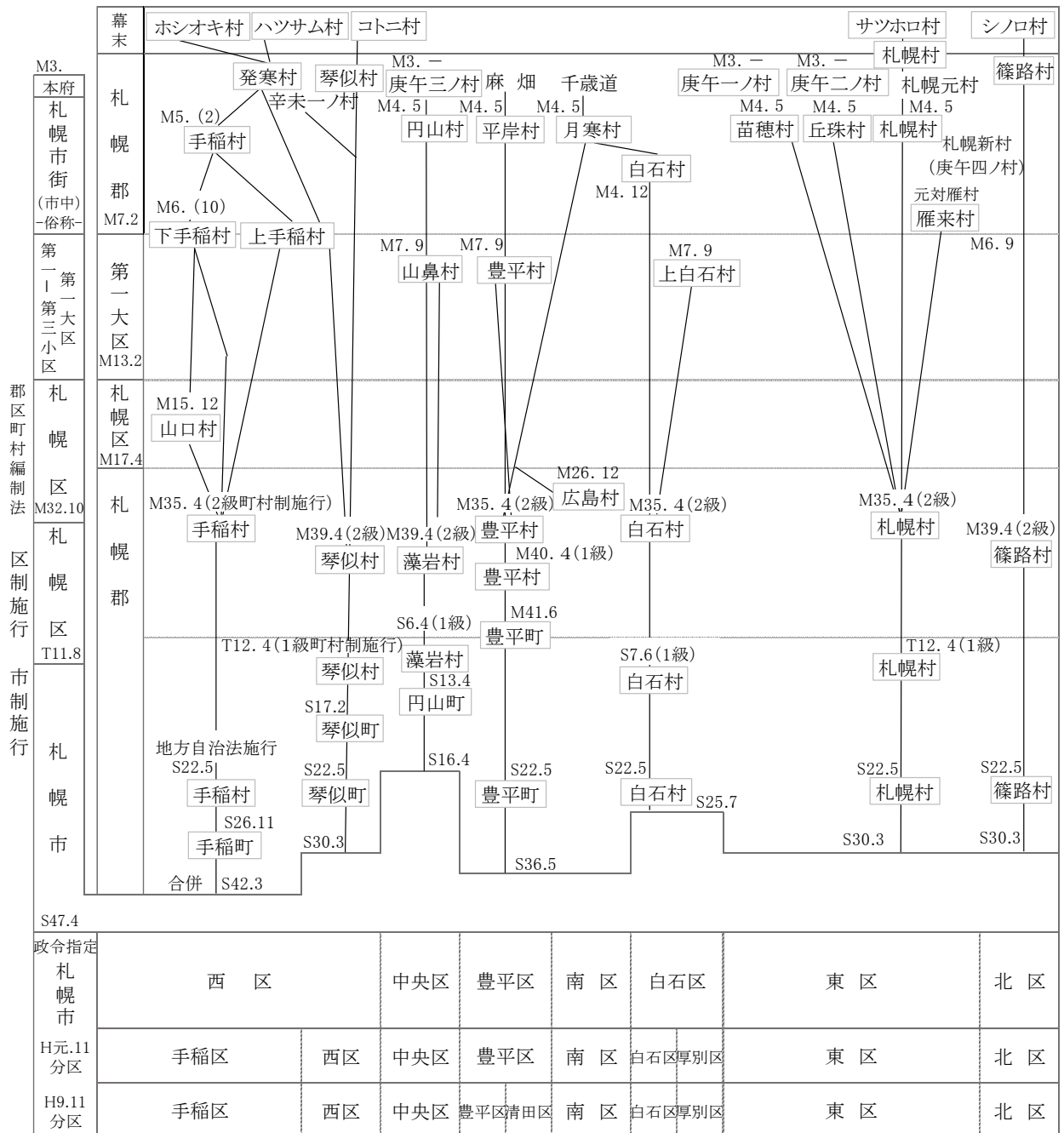
※出典：札幌市統計書(平成30年版)



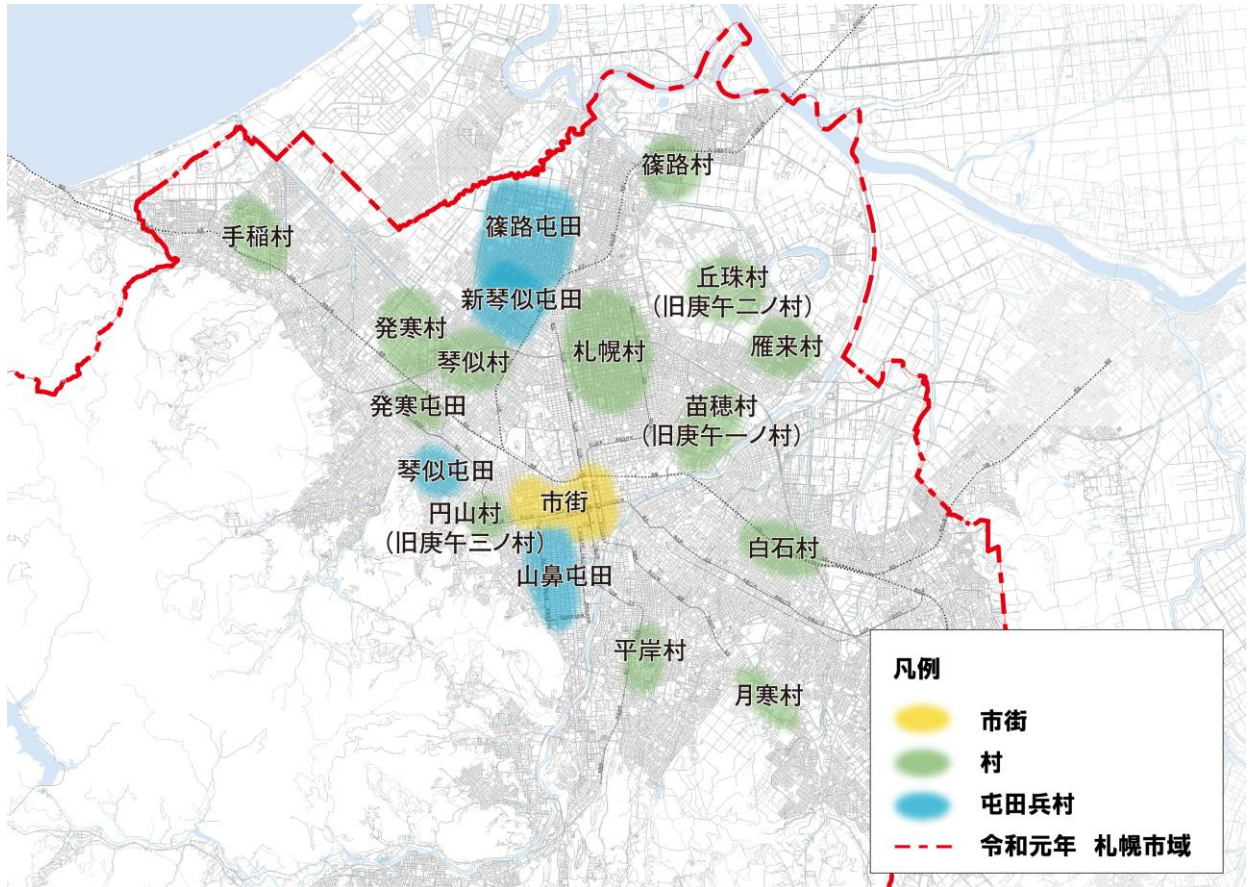
札幌市の人口の将来見通し(各年10月1日現在)
資料：総務省「国勢調査」、札幌市

(2) 市域の変遷

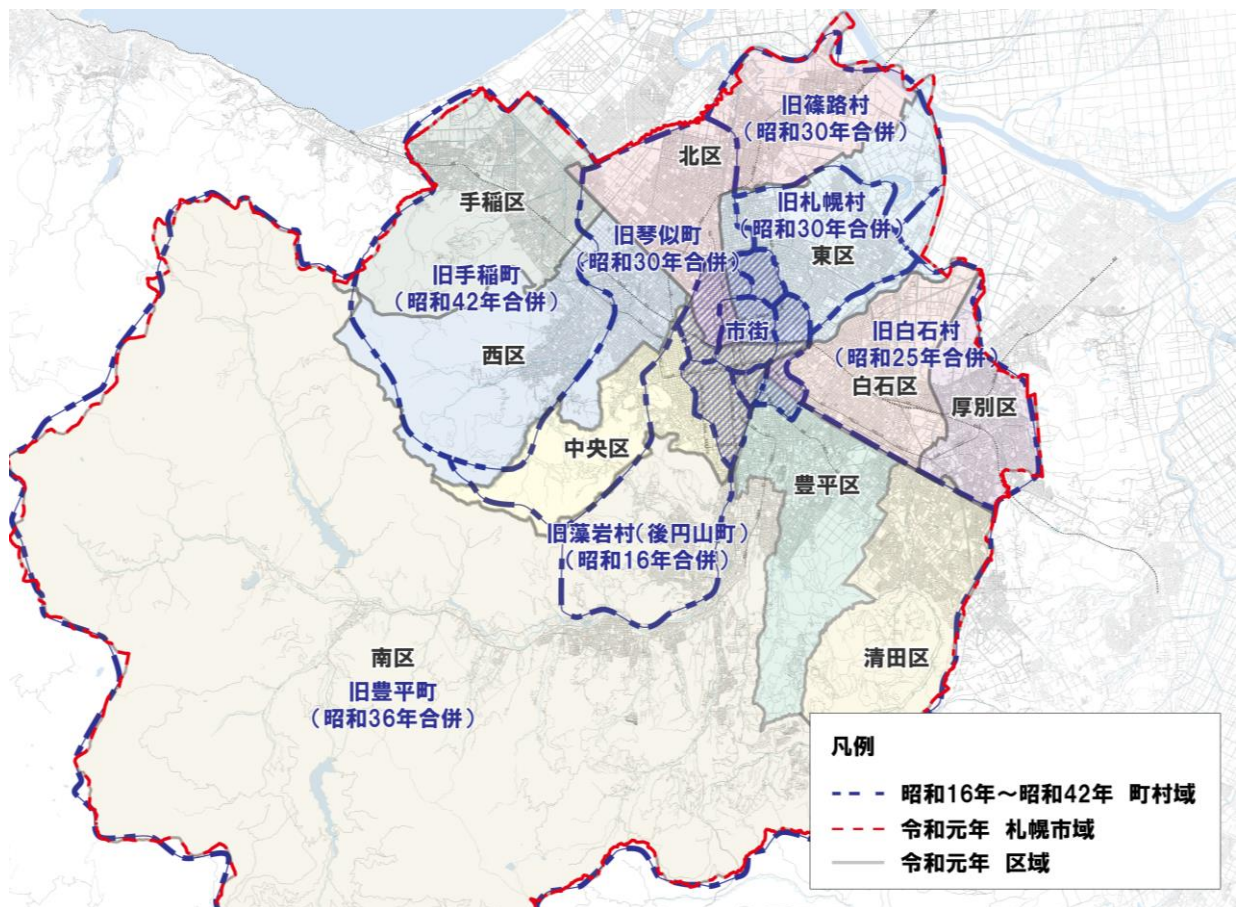
現在の札幌市域は、開拓使³⁹の本府建設によって早期に市街地として発展を遂げた都心部と、幕末以降、国の移民政策等によって形成された周辺村落等の中で、合併や境界の変更が繰り返されたことで形成されました。現在の行政区の区域とかつての村落等の区域は必ずしも一致しませんが、市域の変遷についてはおおむね下図のとおりです。



³⁹ 開拓使：北海道の開拓経営のためにおかれた官庁。明治2(1869)年に設置され、明治15年(1882年)に廃止と、短期間ではあったが北海道発展の基礎を固めるうえで大きな役割を果たした。



明治3～6年頃の札幌郡 札幌市街と屯田兵村及び周辺村



周辺町村合併の変遷及び現在の区域

(3) 交通

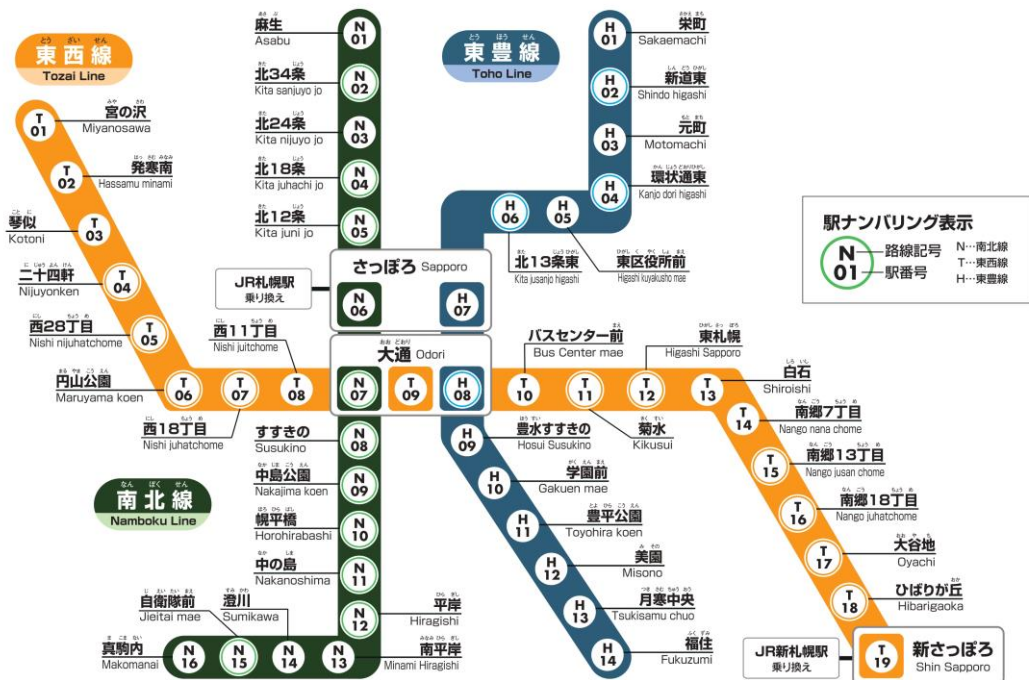
1) 道路交通

札幌市の道路交通は、市街地中心部に格子状の街路網が整備され、それを囲む環状道路と、環状道路を中心に東西南北に向かう放射状の道路が配置されることで骨格が形成されています。また、自動車専用道路として、白石区の札幌ジャンクションを起点に、旭川方面と千歳・苫小牧・函館方面へ延びる道央自動車道と、小樽方面へ延びる札幌自動車道が通じています。

2) 公共交通機関

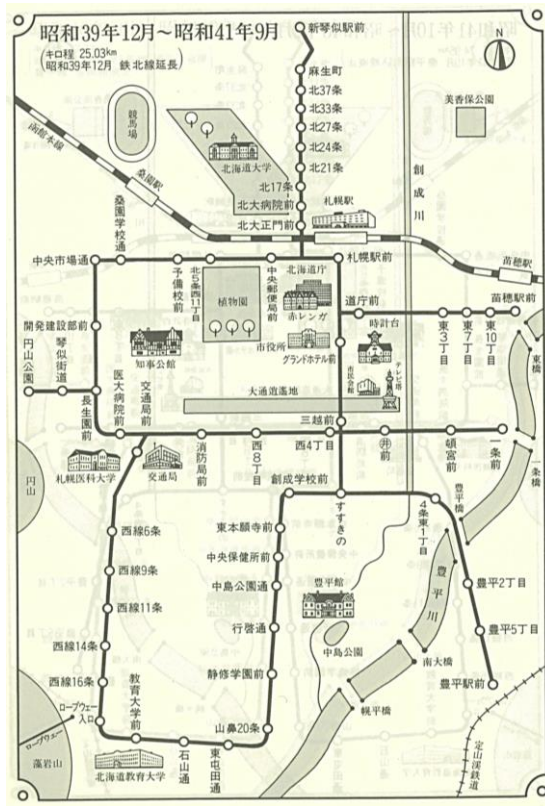
札幌市内の公共交通機関には、市営地下鉄、路面電車（市電）、北海道旅客鉄道株式会社（JR北海道）が運航する鉄道及び民間5社による路線バスがあります。また、東区には札幌市と道内外6都市とを空路で結ぶ札幌丘珠空港を有します。

市営地下鉄は、北区麻生と南区真駒内を結ぶ全長14.3kmの南北線、西区宮の沢と厚別区新札幌を結ぶ全長20.1kmの東西線、東区栄町と豊平区福住を結ぶ全長13.6kmの東豊線の3路線で、積雪のある札幌で雪の影響を受けない重要な移動手段です。また、世界的にも珍しいゴムタイヤ式の車両を採用していることも特徴です。

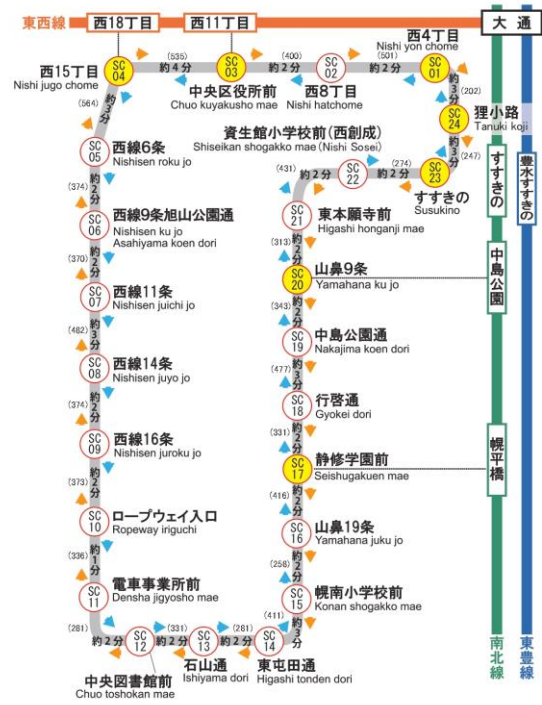


地下鉄路線図
出典：札幌市交通局HP

路面電車（市電）は、かつて北は新琴似駅前、南は豊平駅前（豊平区豊平5条9丁目辺り）まで路線を拡大したことがありましたが、現在は中央区に1系統のみ延長8.9kmの区間で環状運転を行っています。



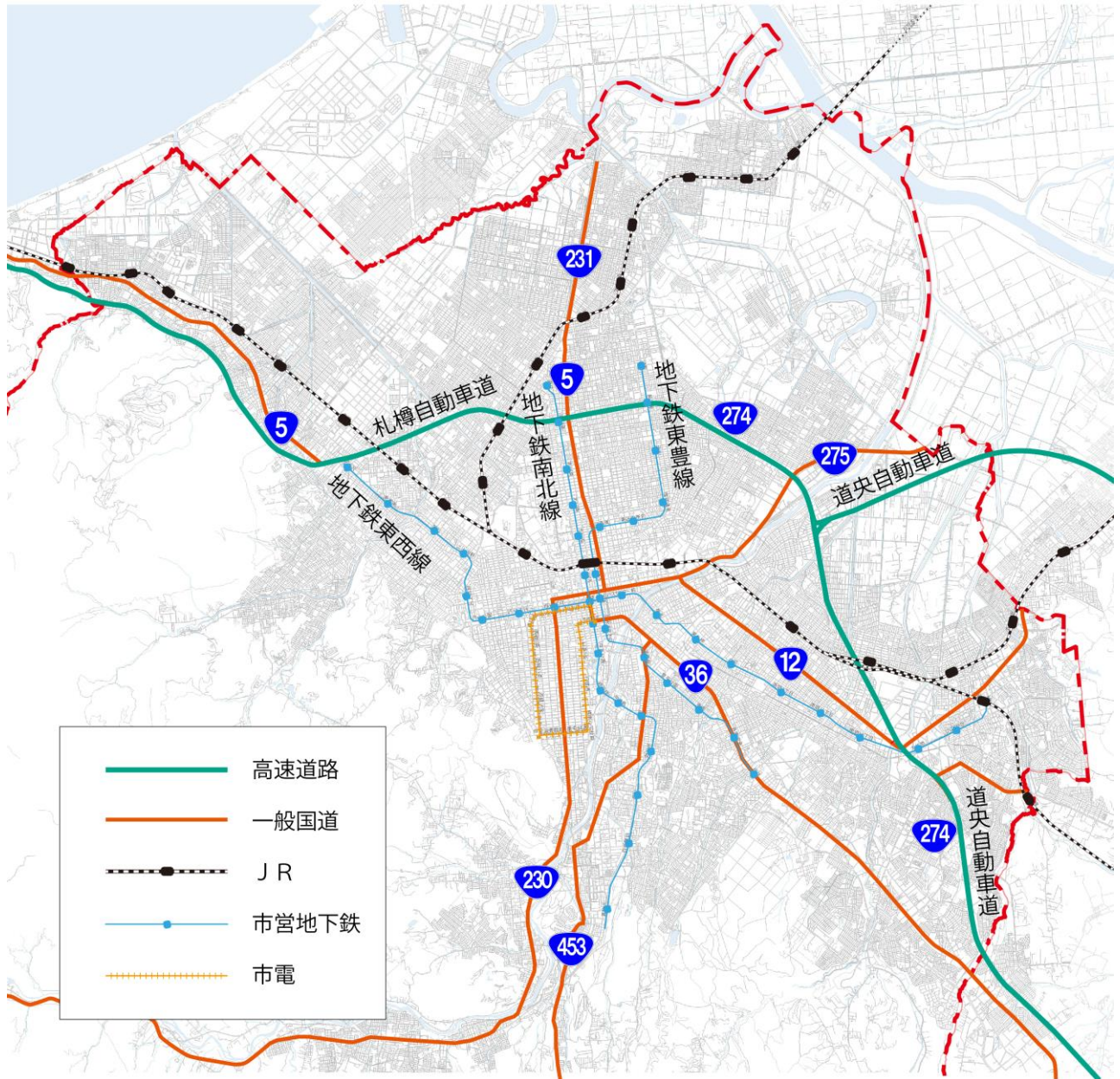
最盛期の市電路線図
出典:『さっぽろ文庫 22 市電物語』札幌市教育委員会編



現在の市電路線図
出典:札幌市交通局 HP

鉄道は、JR 札幌駅を中心に小樽・手稲方面と厚別・江別（旭川）方面を結ぶ函館本線、函館本線から分かれ、白石駅を起点に厚別区上野幌・千歳方面へ延びる千歳線、桑園駅を起点に北区あいの里・石狩当別方面へ延びる札沼線（学園都市線）があります。また、令和12年度（2030年度）までには北海道新幹線の延伸が予定されています。

路線バスは、3箇所ある都心のバスターミナルに加え、終点付近や主要な中継点となる地下鉄駅等の乗継用バスターミナルを発着点として市内広範囲をカバーします。

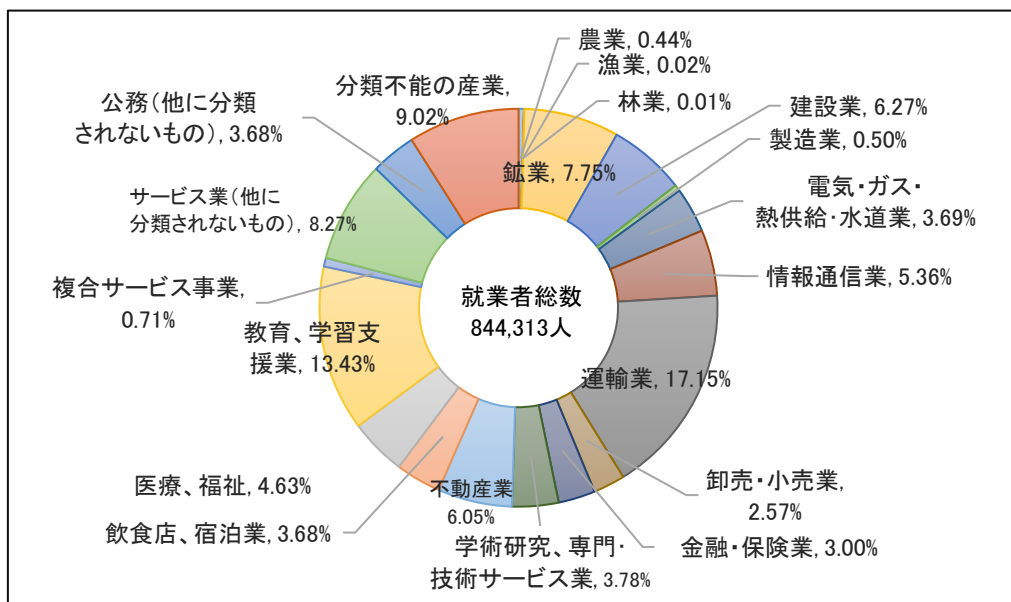


現在の交通路線図

(4) 産業

札幌市の産業を分類別に比較すると、農業などの第1次産業、製造業などの第2次産業の割合は低く、運輸・サービス業などの第3次産業の割合が高くなっています。全国的に、都市部で第3次産業の割合が高まるなかでも札幌はその傾向が強く、産業構造は、市内向けに商品やサービスを提供する内需中心型です。また、市内企業の9割以上が中小・小規模企業であり、経済が中小企業によって支えられていることも特徴です。

特に、札幌市を含めた北海道経済の成長をけん引する分野として「観光」と「食」が注目されており、札幌市が行った「平成30年来札観光客満足度調査」では、観光満足度（総合満足度）が8割を超え、札幌旅行の目的や楽しみについて「美味しいものを食べる」と回答した割合が81.5%と最も高く、「食」は札幌のブランドイメージを構成する重要な魅力資源ともなっています。



産業(大分類)別15歳以上就業者数(平成27年度)
出典:札幌市統計書(平成30年版)

	第1次産業	第2次産業	第3次産業	分類不能の産業 ⁴⁰	総数
平成17年度	3,552人	134,016人	675,745人	27,319人	840,632人
平成22年度	3,534人	118,904人	658,853人	79,746人	861,037人
平成27年度	3,790人	118,503人	645,868人	76,152人	768,161人

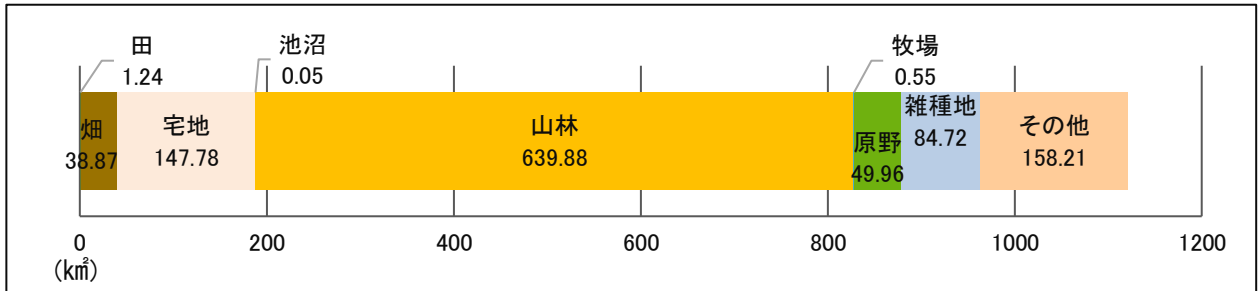
産業(大分類)別15歳以上就業者の推移
出典:札幌市統計書(平成30年版)

⁴⁰ 分類不能の産業:日本の公的統計における産業分類として総務省がまとめた分類のうち、産業分類上、いずれの項目にも分類しえない事業所が分類される。

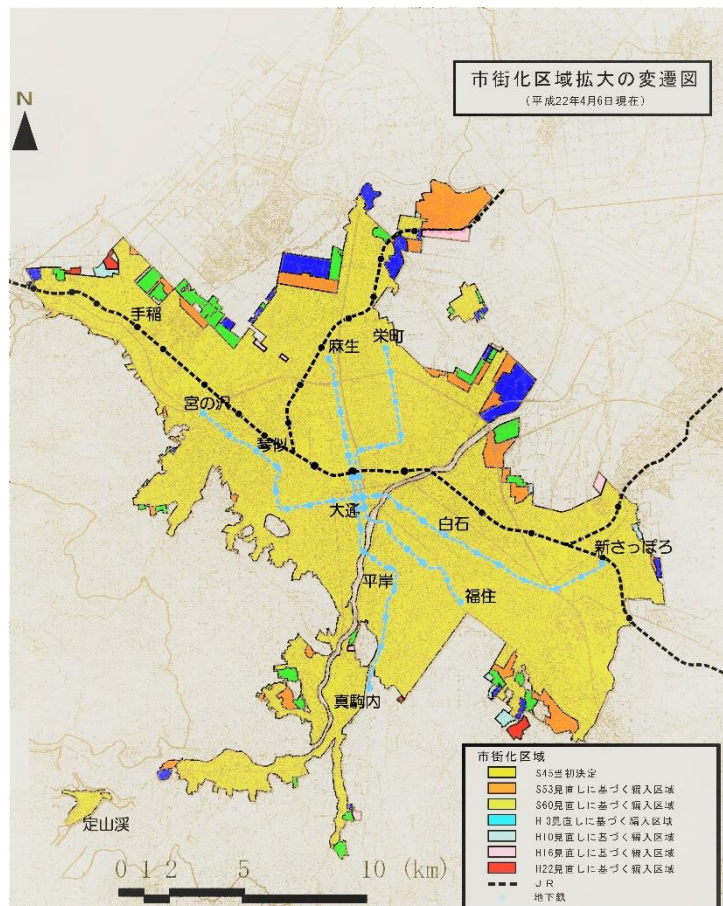
(5) 土地利用

札幌市の土地利用状況は、登記地目で見ると全体の6割程度が山林で、宅地は全体の約1割です。

南西部の国有林を除く 567.95 km²（全市域の約 50.7%）が都市計画区域⁴¹に指定されています。都市計画区域の内訳は、市街化区域⁴²は 250.17 km²、市街化調整区域⁴³は 317.78 km²です。



地目別面積の状況(平成28年)
出典:第125回(平成30年)北海道統計書



市街化区域拡大の変遷図(平成22年4月6日現在)
出典:札幌市HP

⁴¹ **都市計画区域**: 都市計画法の規定が適用される区域のこと。自然環境や社会環境などから、一体の都市として総合的に開発したり保全したりする必要のある区域が指定される。

⁴² **市街化区域**: 都市計画区域のうち、すでに市街地を形成している区域と、今後おおむね10年以内に市街化を図るべき区域。

⁴³ **市街化調整区域**: 都市計画区域のうち、市街化を抑制する区域。

3 歴史的環境

札幌の歴史的環境について、札幌の文化財や歴史文化の成立に深く関わると考えられる出来事を中心に、必要に応じて他の地域の歴史にも触れながら記載します。

(1) 旧石器文化

現在、日本列島に現生人類が住み始めたのは、今から約4万年前頃と考えられています。北海道で最も古い人類の足跡は、今のところ3万年前くらいまで遡りそうです。当時は、いわゆる最終氷期で年平均気温は現在よりも7～10℃ほど低く、海水面は100m以上も低かったといわれています。このとき北海道とユーラシア大陸との間の海峡は陸地化しており、旧石器文化の人々は、この陸橋を渡って北海道の地にやってきました。この頃の人々は、大型哺乳動物などの獲物を求めて、移動を繰り返す生活を送っていたと考えられています。

札幌市内でも旧石器文化の石器が見つっていますが、その石器の形から、市内で最初に人類の足跡を残したのは、1万数千年前頃の人々と考えられます。

(2) 縄文文化

長い氷河期が終わり、1万5000年前頃から1万1500年前頃にかけて温暖化が進むと、気候が安定するようになります。この頃に、旧石器文化を担った人々の子孫たちが、縄文文化を生み出していたと考えられています。安定的で温暖な気候が長く続いたことは、縄文文化が持続した大きな要因の一つであり、当時の人々は、森林や湖沼、海辺などの豊かな自然の恵みを上手に利用することで、同じ場所に長く住み続けられるようになりました。



竪穴住居跡(縄文晩期)の発掘風景

北海道内では、帯広市の遺跡から約1万4000年前(縄文草創期)の土器と石器が発見されていますが、札幌市内で縄文草創期の遺跡は見つかっていません。市内で最も古い土器は、主に野幌丘陵や月寒台地などにある遺跡から見つかったもので、今から約8000年前の縄文早期のものです。この頃までに温暖な気候はピークを迎え、縄文海進に伴って現在の札幌市域にも海水が浸入し、札幌北部の低地には内湾が形成されます。その後、川が運んできた土砂で北西部には砂州が形成され、内湾は徐々に埋め立てられていきます。札幌の縄文遺跡は、生活に適さなかった北部低地を取り囲むように、台地・丘陵部のほか、扇状地から海岸砂丘まで、広くその足跡が残されています。

(3) 続縄文文化

縄文文化の中頃をピークとして、温暖な気候は徐々に寒冷化し始め、縄文文化の終わり頃には、現在とほぼ同じくらいの気候・自然環境になります。この頃、大陸から日本列島に農耕文化が波及して、弥生文化が生まれます。この影響を受けて、北海道でも縄文文化に変化が起きます。この頃の遺跡からは、東北地方北部で作られた土器や弥生文化に特有の管玉（くだたま）などが発見されるようになります。一方で、北海道の続縄文文化の遺跡から発見されることの多いコハク製の玉が東北地方北部の遺跡から発見されることもあり、道央部以南と東北北部との交流が盛んだったことが分かっています。東北地方北部まで広がった弥生文化ですが、北海道では、稲作を主体とする弥生文化そのものは受け入れられませんでした。弥生文化の影響を受けながらも、縄文文化の要素を引き継ぐ、続縄文文化へと移り変わっていったのです。

札幌市内の遺跡でも、東北地方北部で作られた土器や管玉などが見つまっているほか、北方の文化との交流を示す土器や石器なども見つかっています。また、遺跡の立地や環境にも変化が起こります。台地や丘陵の上にあった生活圏が、低地部の乾燥化が進むことで徐々に北側へと広がっていきます。遺跡に遺された焚き火跡からは、シカやヒグマなどの動物骨や、サケ科、ウグイ、イトヨ、チョウザメ科などの回遊性・淡水性の魚類のほか、ニシンやフサカサゴ科といった海水性魚類の骨も見つかっており、河川や海辺での漁も盛んに行われていたことが分かっています。

(4) 擦文文化

擦文（さつもん）文化は、ほぼ本州の奈良・平安時代に相当し、7世紀後半頃に、本州の律令国家勢力圏文化の強い影響を受けて成立します。それまで、1万年以上使われ続けた縄文が、土器の表面から姿を消し、本州の土師器をまねた擦文土器が使われるようになります。



擦文土器

「擦文」という名称は、当時作られた土器の表面に、へら状の木片などによると考えられる擦り痕が付いていることに由来します。

擦文文化は、本州の生活様式を受け入れながら独自の文化を育み、南から北、東へと分布を広げ、9～10世紀頃には、既に北海道のオホーツク海側沿岸に広がっていた北方系のオホーツク文化とも融合しながら、10世紀頃には北海道全域に、さらに東北北部やサハリン南部、千島列島南部にまで広がりました。

札幌市内でも、8世紀頃から13世紀頃まで、途切れることなく擦文文化の遺跡が見つかっています。当時の集落は、河川のすぐそばに営まれ、狩猟、漁労⁴⁴、採集のほか、アワ、ヒエ、キビなどの雑穀農耕も行われていました。特に、かつて湧き水のあった北海道庁、北大植物園、北海道知事公館のあたりを源に流れ出した幾筋もの河川が北海道大学の北側で集まり、篠路方面に北流していた旧琴似川流域には、数多くの遺跡が集中して見つかっています。

⁴⁴ 漁労：魚介類や海藻など水産物をとること。

(5) アイヌ文化期以降

本州で平安時代が終わり鎌倉時代になる頃、北海道では、土器や竪穴住居⁴⁵が作られなくなり、擦文文化が終わりを迎えます。土器は、鉄鍋や木製の漆器に、竪穴住居は平地式住居⁴⁶に変わっていきます。これ以降、本州の中世から近世に相当する時期を、北海道の考古学上の時代区分としてアイヌ文化期と呼び、この時期を通して、アイヌ文化が形成されていったと考えられています。

なお、現在アイヌ文化として捉えられている文化は、「近世に松前藩や本州の役人・旅行家が残した記録や、近代から現代にかけて行われた民族学的調査によって明らかになっている*」ものと考えられています。

札幌市内でもアイヌ文化期の遺跡はいくつか見つかっており、事例としては少ないものの、中央に炉跡を伴う平地式住居跡や平面が長楕円形で副葬品を伴う土坑墓、遺物では、主に鍋や刀、刀子といった金属製品のほか、漆器や陶磁器などが見つかっています。

※出典：長沼孝・越田賢一郎2011「時代の概観」 「I 考古学から見た北海道」 『新版北海道の歴史上』北海道新聞社

■石狩周辺への和人の流入

札幌を含む石狩川下流域は、鮭等の資源が豊富で、かつてアイヌ民族のコタン⁴⁷が多く存在していました。1700年代後半には、豊平川流域などに松前藩がアイヌ民族と交易するための商場（後のイシカリ十三場所の一部）が成立し、相互の交易が盛んになりました。

アイヌ民族は、古くから狩猟・採集と補助的な農耕等に加え、交易を生業としていましたが、松前藩が幕府の許可を得て蝦夷地での交易を独占するようになると、次第に交易の条件等がアイヌ民族にとって不利なものに変わっていきます。イシカリ十三場所の成立期には、藩が商場の経営権を商人に委ねる場所請負制⁴⁸が一般化し、場所請負人である商人が直接漁業経営に乗り出すと、アイヌ民族は、和人商人らの取引相手から、漁場労働者へと立場を変えざるを得なくなりました。

■石狩役所の設置

いわゆる元文の黒船⁴⁹来航（元文4年（1739年））により、ロシア帝国の脅威を認識した幕府は、蝦夷地の領有を対外的に宣言し、国防を強化するため、寛政11年（1799年）に東蝦夷地を、文化4年（1807年）には札幌を含む西蝦夷地を相次いで直轄化しました。文政4年（1821年）に一度松前藩に復領⁵⁰するも、安政2年（1855年）には蝦夷地全域を再び直轄化します。

幕府は同年、箱館奉行を置くとともに、東西蝦夷地交通の要衝であった石狩地方を国防と開拓の重要拠点と定め、石狩役所を設置し、幕府による札幌周辺の開拓が加速していくこととなりました。

⁴⁵ 竪穴住居：地面を掘りくぼめ、その上方に屋根をかけた半地下式の住居形式。縄文・弥生・古墳時代に広く行われた。

⁴⁶ 平地式住居：竪穴を掘らず、地表を床面として構築された住居形式。

⁴⁷ コタン：（アイヌ語）村。集落。

⁴⁸ 場所請負制：松前藩の藩主や藩士が、運上金を納めさせる代わりに蝦夷地における交易の権利を商人に委託し、交易を行う場所の経営を請け負わせた制度。

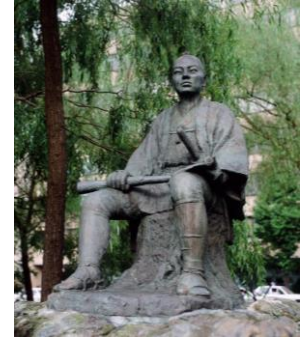
⁴⁹ 元文の黒船：鎖国期であった元文4年（1739年）、牡鹿半島、房総半島、伊豆下田などに、ロシア帝国より来航した探検船。元文の黒船来航事件。

⁵⁰ 復領：異国の脅威のため一時幕府の直轄領としていた蝦夷地を、再び松前藩の領地としたこと。

■幕府の移民政策による諸村の開拓

幕末には、幕府が移民政策をとり、幕臣らが農地を開きました。安政4年（1857年）頃から、発寒、星置などで開墾が始まり、石狩役所の荒井金助が開いた荒井村は、後の篠路村となりました。安政5年（1858年）頃には、早山清太郎が札幌で初めて稲作を成功させ、その後篠路村に本拠を移しています。

慶応2年（1866年）、二宮尊徳門下で報徳仕法（農村復興政策）を学び、渡島国で開拓の実績があった大友亀太郎が、幕府の命を受けて御手作場⁵¹を開き、大友がこのとき開削した「大友堀」は、後に創成川の一部となりました。



大友亀太郎像
札幌市公文書館所蔵

札幌のアイヌ民族の歴史

これまで札幌の歴史は、その多くが幕末から明治期以降に各地から移住した人々の「開拓の歴史」として語られ、アイヌ民族の姿が登場するのは、近世以前に限られることも少なくありませんでした。札幌のアイヌ民族を知る手掛かりとなる文献や史料の不足がその一因ですが、昭和30年代頃まで、アイヌ民族の動態についての公的な調査・把握が行われてこなかったことが、こうした事態を招いたとの指摘もあります。

実際には、アイヌ民族は、明治期以降も札幌開拓の様々な場面で働き手として貢献するなど、国の土地政策・同化政策の影響を受けながらも、今日まで札幌の生活者であり続けています。また、20世紀になり、北海道の政治・経済の中心都市となった札幌は、アイヌ民族にとって様々な活動の場ともなってきました。

大正時代には、キリスト教伝道師ジョン・バチェラーが中心となり、札幌の中等学校等に通うアイヌ民族の若者の寄宿舎となる「バチェラー学園」が開設されましたが、アイヌ民族の女性でバチェラーの養女となったバチェラー八重子らが寄稿した「ウタリグス」誌の反響などもあり、学園には多くのアイヌ民族が集いました。昭和に入り、アイヌ民族の伝統工芸に対する社会的関心が高まると、市内にアイヌ民族が営む工芸店が登場します。

昭和57年（1982年）には、開拓使による河川での鮭の採捕禁止により行われなくなっていた、新しい鮭を迎えるアイヌ民族の伝統儀式「アシリチェブノミ」が豊平川で復活し、また、平成6年（1994年）には、国の重要無形民俗文化財であるアイヌ古式舞踊（昭和59年（1984年）指定）の保護団体に札幌ウポポ保存会が指定されるなど、札幌では、アイヌ民族の伝統文化を継承する活動も続けられています。

⁵¹ 御手作場：官の扶助・保護によって開墾した農場のこと。

(6) 近現代（市制施行まで）

■開拓使の設置

明治2年（1869年）、明治政府は開拓使を設置し、北海道開拓の拠点として、札幌の都市建設が始まりました。中でも、黒田清隆が開拓を主導した明治4年（1871年）以降は、潤沢な予算に支えられ、アメリカ合衆国を主体とした多数の外国人技師の招へいと最先端技術の導入により、農業の近代化や産業の振興が計画的に進められました。



北海道庁庁舎
北海道大学附属図書館蔵

明治15年（1882年）には開拓使が廃止され、函館県・札幌県・根室県が並立した3県一局時代を経て、明治19年（1886年）からは北海道庁が設置され、札幌はその本庁所在地となりました。

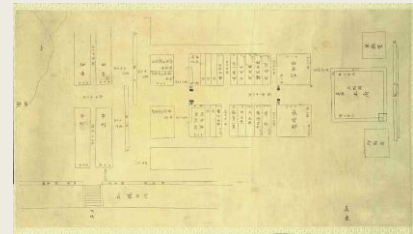
本州ほかの各地からの移住者により形成された町村と中心市街地を結ぶ交通網等の整備、湿地帯の排水による農地化が進んだことは、後年の人口増に対応した、周縁部を含めた急速な都市化を支える基盤となりました。一方で、先住民族であるアイヌ民族は、それまでのように土地を利用できなくなり、生活に深刻な影響を受けることとなりました。

トピック

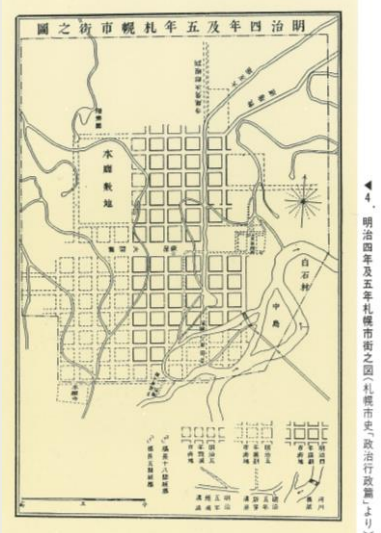
島義勇と岩村通俊

開拓使による札幌の都市建設は、旧佐賀藩士の開拓判官・島義勇の構想から始まりました。明治2年（1869年）10月、この地に到着した島は、現在の円山にあたるコタンベツの丘から眼下に広がる大地を見下ろし、街づくりに思いを巡らせたと言われています。島の構想を記した「石狩国本府指図」には、現在の札幌の特徴につながる整然とした街区割りや、後の大通公園に相当する（官民街を分ける）空閑地も既に見られますが、島は札幌開拓着手から3か月余り経った明治3年（1870年）1月、志半ばで任を解かれます。

島の解任後にその構想を引き継ぎ、手を加えて実際の街づくりに落とし込む仕事を進めたのは、後に北海道庁初代長官を務めることになる岩村通俊でした。島と岩村の時代を通して、札幌神社（後の北海道神宮）、日本最古の都市公園とされる偕楽園、札幌で最初の官立学校である資生館、後の歓楽街すすきのへ発展する遊郭などが次々と形成され、岩村の任期直後に竣工した開拓使本庁舎やお雇い外国人宿舎などの洋風建築物は、当時の市街地の景観を様変わりさせるものでした。二人の開拓判官の働きにより動き出した札幌の本府建設は、後に黒田清隆らが進めた「開拓使10年計画」による北海道開拓の足掛かりとなるものでした。



石狩国本府指図
北海道大学附属図書館蔵



明治4年及び5年札幌市街之図
出典：『さっぽろ文庫別冊・札幌歴史地図（明治編）』
札幌市教育委員会編

札幌の屯田兵

札幌には、屯田兵が発展の礎を築いた地域があります。明治8年（1875年）、当時の琴似・発寒両村にまたがる地域に最初の屯田兵村である琴似兵村が、続いて明治9年（1876年）には、中心市街地に接し藻岩山と豊平川に挟まれた地域に山鼻兵村が開かれました。また、後年は北部低地に、明治20～21年（1887～1888年）の新琴似、明治22年（1889年）の篠路の両兵村が開かれ、軍事訓練を行いながら農地の開墾、道路や用水路・排水溝等の基盤整備等の任にあたりました。

札幌の屯田兵は、前期（琴似・山鼻兵村）は主に宮城、福島、青森等の東北地方からの、後期（新琴似・篠路兵村）は主に佐賀、熊本、福岡、山口等九州や西日本から志願者を入地させたもので、言葉や習慣の異なる地方から集まった人々が、慣れない土地で様々な苦労を経験しながら地域の発展を支えました。明治10年の西南戦争、明治28年の日清戦争など有事の出兵はもちろん、平時の警備や災害時出動などの治安維持も屯田兵の職務でした。



琴似屯田兵屋
北海道大学附属図書館所蔵

■地方自治の時代へ

明治32年（1899年）、北海道区制⁵²の制定と同時に、本府に始まる中心市街地が地方自治体としての札幌区となり、明治43年（1910年）には、札幌区に周辺の豊平・白石・札幌・藻岩の各町村の一部区域が編入されました。

大正時代に入ると、第一次世界大戦による軍需が札幌の鉱工業の発展を後押ししました。大正7年（1918年）に札幌区・小樽区を会場として開催された「開道五十年記念北海道博覧会」は、約1か月半の期間中に140万人を超える来場者を記録する、当時の地方博覧会としては大変大きなもので、札幌は北海道内外に広く紹介されることとなりました。

このような中、大正11年（1922年）の市制施行により札幌市が誕生しました。

トピック

札幌農学校と遠友夜学校

北海道大学の前身である札幌農学校は、明治5年（1872年）、北海道開拓に従事する人材育成のため、東京に「開拓使仮学校」が開設されたことに始まります。明治8年（1875年）の札幌移転後に「札幌学校」となり、さらに翌年には「札幌農学校」へと改称されました。同校は、日本で初めて学士の学位を授与する仕組みを持った教育機関でもあります。

初代教頭としてマサチューセッツ農科大学の学長であったウィリアム・クラークが招かれ、8か月の在任期間中にその教えを受けた第一期生には、後の北海道帝国大学（札幌農学校の後身で、大正7年（1918年）に設置され、昭和22年（1947年）に北海道大学に改称）初代総長となる佐藤昌介ら、また、クラークの帰国後、ウィリアム・ホイラーが教頭に就任した後に入学した第二期生には、内村鑑三、宮部金吾らの名が見られるなど、北海道開拓のみならず近代日本の発展に貢献した多くの人材が同校から輩出されました。

また、札幌農学校と関係が深い札幌の歴史に残る特色ある学びの場として、「遠友夜学校」があります。遠友夜学校は、明治27年（1894年）、札幌農学校を卒業し同校の教授となっていた新渡戸稲造とその支持者により開かれた私塾で、経済的な理由で就学できない青少年らの学ぶ意欲に応えるため、当時としては珍しく、男女の別なく無料で授業を行いました。その崇高な精神に共鳴し、無償で学務や教師の仕事を買って出た友人や札幌農学校生、温かな援助を惜しまなかった市民らにも支えられ、約50年にわたり、年齢・性別にかかわらず多くの市民に学びの機会を提供し続けました。



遠友夜学校新校舎
出典：記念写真帖(昭和5年)

⁵² 北海道区制：市制に関連した大日本帝国憲法下における地方自治に関する勅令。札幌区・函館区・小樽区、旭川区、室蘭区、釧路区がそれぞれ発足した。大正13年（1923年）、本勅令は廃止された。

(7) 近現代（市制施行後）

昭和12年（1937年）、第5回冬季オリンピックの札幌開催が決まるも、日中戦争による国際情勢の悪化から、翌年には開催権の返上を余儀なくされます。

昭和16年（1941年）には太平洋戦争が開戦し、戦時下の札幌では、食料や生活物資の不足、女性の軍需工場への動員など市民生活に様々な影響があり、食糧難から大通公園が野菜畑として利用されたこともありました。昭和20年（1945年）7月14日、15日の北海道空襲では、札幌でも丘珠飛行場（現丘珠空港）や白石、東苗穂、手稲周辺で被害があり、死傷者を出しました。

終戦直後は狸小路の創成川岸一帯には闇市ができ、生活必需品を求める市民が集まりました。一方、戦後まもない昭和25年（1950年）には、大通公園を会場に最初の雪まつりが開催され、まだ小規模ながら雪捨て場だった大通をイベント会場にする市民活動の端緒が見られます。

戦後、札幌市は、昭和30年（1955年）に札幌村、篠路村及び琴似町、昭和36年（1961年）には豊平町、昭和42年（1967年）には手稲町とそれぞれ合併したことで、市域は現在とほぼ同じ範囲に広がりました。また、この時代は、引揚者や疎開者の復帰、更に炭鉱離職者の流入など、北海道内の景気変動や産業構造の変化に伴う人口移動に出生率の向上も加わって人口が急増し、周縁部の農地等でも市街化が進みました。

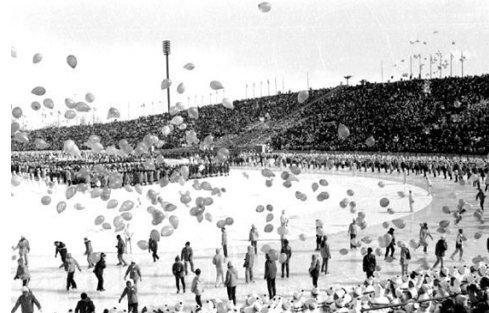
昭和41年（1966年）に第11回冬季オリンピックの札幌開催が決定すると、大会に合わせたインフラ整備と建設ラッシュにより街の姿は大きく変わり、大会開催年の昭和47年（1972年）に札幌市は政令指定都市となります。また、オリンピックの開催は、札幌の国内外での知名度向上や、国際都市としての市民意識の醸成など、今日の札幌につながる様々な変化をもたらしました。



札幌飛行場
札幌市公文書館所蔵



闇市(狸小路)
札幌市公文書館所蔵(複製)



札幌オリンピック開会式
札幌市公文書館所蔵



地下鉄南北線(ホーム)
札幌市公文書館所蔵

アイヌ民族をめぐる動き ～アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律の成立まで～

■同化政策の始まり

近世以降、本州などからの移住者による北海道開拓が本格化すると、場所請負制や、国の土地政策、同化政策により、アイヌ民族はその生活と文化に大きな打撃を受けることとなりました。明治政府が、それまでアイヌ民族が居住していた土地や、狩猟や採集など活動の場としていた土地を官有地に編入し、民間に払い下げると、生活基盤を失ったアイヌ民族は困窮を深めることになりました。

■北海道旧土人保護法の成立

明治32年（1899年）、困窮するアイヌ民族救済のための法律として、「北海道旧土人保護法」が成立しました。この法律は、主にアイヌ民族の農耕民化と、日本語や和風の習慣の教育によって同化を進めようとするもので、農業に従事しようとするアイヌ民族に土地を付与する規定を設けたものの、実際に付与されたのは新規就農者には開墾が極めて困難な「未開地」であったため、アイヌ民族の生活向上につながる例は少数でした。また同法は、アイヌ民族の子ども達のための学校設置を規定しましたが、その後、学校でアイヌ語やアイヌ風的生活習慣を禁じたことは、アイヌ民族の子ども達が、それらを身に着ける機会を狭めることとなりました。

■民族自立に向けた活動

大正時代には、大正デモクラシーに象徴される社会の自由な雰囲気が広がり、アイヌ民族自身による、民族復権に向けた活動が活発になります。知里幸恵、遠星北斗、バチエラー八重子らの著作の発表や、知里真志保によるアイヌ語学研究的活動は、アイヌ民族やアイヌ文化に対する社会的関心を高める契機となりました。



ジョン・バチエラー師の一家
北海道大学附属図書館所蔵

昭和21年（1946年）には、アイヌ民族の尊厳の確立と社会的地位の向上等を目的として、社団法人北海道アイヌ協会（後に、社団法人北海道ウタリ協会、現在は公益社団法人北海道アイヌ協会に改称）が設立されました。

■アイヌ文化振興法の成立

昭和59年（1984年）、当時の北海道ウタリ協会は、北海道旧土人保護法の廃止と、アイヌ民族の基本的人権の回復や差別の解消、教育・文化面における総合的な施策の実施等を定める法律の制定を、北海道知事及び議会に陳情しました。こうした活動は、平成9年（1997年）の北海道旧土人保護法の廃止と、協会が国に求めた内容のうち、主に文化に関する内容を反映した「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」（「アイヌ文化振興法」）の成立につながりました。

■国際世論と国連宣言

1970年代半ば以降の、先住民族の境遇等についての国際的な関心の高まりは、先住民族の定義の確立を模索する活動（コーボ報告等）や、自己決定権をはじめとする先住民族の権利の保障等についての世論を喚起し、平成19年（2007年）には、国連総会において「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が採択されます。国連宣言の翌年、日本の国会は「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」を採択しました。



「国際先住民族年とアイヌ民族の人権」
シンポジウム
札幌市公文書館所蔵

■アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律の成立

平成31年（2019年）2月、アイヌ文化振興法に代わる「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」が成立しました。この法律に初めてアイヌ民族を先住民族と明記したことは、アイヌ民族の地位向上への一歩との評価がある一方、土地や資源に対する先住民族の権利への言及がないなどの課題も指摘されています。